

豊かな言語活動と体験活動をふまえた学習活動の実践 — 「確かな学力」を培う基盤として—

I 主題設定の理由

ここ数年、青少年を取り巻く環境の急激な変化に伴って、いわゆる「学力低下」の問題、学習や就労に対して無気力な若者の増加、規範意識や体力の低下、といった今日的な教育課題が全国的に大きくクローズアップされてきている。

本校においても、学習習慣の定着において二極化が見られるなど、こうした傾向が徐々に現実化しつつあり、そうした課題に向けて体系的、総合的な手だてを講じる必要性を感じる。

こうした現状に対し、平成18年2月に中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会から出された審議経過報告は、「確かな学力」を育成し、「生きる力」をはぐくむという現行学習指導要領の基本的な考えをさらに一步進める手だてとして、「言葉」と「体験」を重要なキーワードとしている。

そこで、本校ではそうした考えをふまえながら、教育課程全体の中でこの二つのキーワードを研究の柱とし、実践を重ねていきたいと考えた。

教育の目的は、一人ひとりの国民の人格形成と国家・社会の形成者の育成である。学校は、生徒がそれぞれの個性を伸ばしながら、その可能性を開花させるための基盤を培う役割を担う。物事に感動できる心と他を思いやり、共に生きようとする心を養い、学ぶことの喜びを味わいながら問題を解決することによって、確かな学力を身につけようとする意欲や態度を育成するために、学校における教育活動のあらゆる場面で、家庭や地域と連携しながら、「言葉」と「体験」をふまえたはたらきかけを行うことが、これからの社会を生き抜く生徒を育てる一助となると考え、この主題を設定した。

II 研究の内容

1 領域別指導研究

- (1) 学校生活の基盤でもある学級活動において、言語活動を重視し、話す・聞く・読む・書くといった場面を多く設定する。
- (2) 学習活動を通して、学年や学級の集団を高める方策を探る。
- (3) 体験活動を通して、生徒の主体性や創造性を引き出す生徒会活動のあり方の研究を行う。
- (4) 各学年ごとに「総合的な学習」の実践・検証を行う。また、次年度カリキュラムづくりの研究を行う。
- (5) 情報活用能力の育成のための研究を行う。(教科指導でも研究する)

2 教科指導研究

- (1) 基礎・基本の確実な定着をはかる教科指導および評価方法の研究を行い、意欲をもって学習に臨む生徒を育成する。

- (2) 国語科はもちろん、全教科の授業の中で言語活動を充実させることによって、論理的な思考やコミュニケーション能力の育成をはかる。
- (3) 家庭学習や朝学習のあり方の研究を行う。
- (4) 図書館と連携しながら読書活動の充実を図る。
- (5) 選択教科の実践と検討を行う。
- (6) T. Tの有効な指導法の研究を中心に、個に応じたきめ細かな教科指導法を研究する。

3 その他

- (1) 生徒の実態・意識調査をもとにして、研究主題に沿った目指すべきより具体的な生徒像・学級の在り方について研究し、共通理解をもつ。(教育課程)
- (2) 地域に根ざしたカリキュラムの研究を行う。(教育課程)
- (3) 教育相談部を中心とした、学校・学年体制での不登校生徒への対応のしかたを研究する。また、全体での課題提起と共通理解を進める。(生徒指導)
- (4) 生徒指導の三つの機能(「自己存在感」を与える。「共感的人間関係」を育成する。「自己決定の場」を与える。)を生かした教科指導や学級づくりの実践を行う。(生徒指導)
- (5) 学校・家庭・地域と連携した教育実践活動を推進する。また、小中連携の方策を探り、交流を促進する。(地域・家庭連携)

III 成果と課題

1 成果

領域指導研究会・教科指導研究会を中心として研究を進め、全体研究会で成果を発表し合い、さらに深めていくという組織研究を推進した。研究授業等を通し、言語活動と体験活動を重視しながら、生徒の「生きる力」を高める実践活動を進めていくことができた。また、全員が領域指導研究会と教育課程研究会等に所属して、年間計画の作成と研究に携わりながら、それぞれの教科領域からどのように研究主題に迫っていけるかを考え、それに基づいた実践を行うことで、生徒や分野の実態に即した研究を進めることができた。

2 課題

小中連携について、さらに自然な形で交流できる場面をできるだけ多く設定したい。

「言葉」「体験」それぞれをどうとらえ、全校あるいは各学年でいかに共通理解をもって研究実践を進めていくかについて、まだまだ煮詰めが甘い部分がある。また、教科や領域を越えて具体的に取り組めるものについて、さらに話し合いを深めていく必要がある。

「確かな学力」を育成し、「生きる力」をはぐくむことは、学校教育活動を進めていくうえでますます大きな課題になってくる。その基盤となる「言葉」や「体験」に関わる活動について、生徒たちにどう目的意識をもたせ、与えられるものではない彼ら自身の自発的な取り組みにまで高めながら、いかに日常的、継続的なものとしていくか、来年度以降も引き続き研究を重ねていきたい。

(研究主任 齊藤昌志)